



Title	日本語と韓国語の複数形接尾辞の使用範囲 : 文学作品と意識調査の分析結果から
Author(s)	鄭, 惠先
Citation	日本語科学, 17, 27-46
Issue Date	2005
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43836
Rights	ここに掲載する本論文は著作者自身が作成した入稿原稿に基づいて作成したものであり、編集作業を経て最終的に雑誌に掲載された誌面とは異なるものです。本著作物の著作権は大学共同利用機関法人人間文化研究機構に帰属します。本著作物は著作権者である人間文化研究機構の許可のもとに掲載するものです。ご利用に当たっては「著作権法」に従うことをお願いいたします。
Type	journal article
File Information	nihongokagaku.pdf



日本語と韓国語の複数形接尾辞の使用範囲

－文学作品と意識調査の分析結果から－

キーワード

集団名詞, 準集団名詞, 普通名詞, 同質複数, 近似複数

要 旨

本研究は、文学作品と意識調査結果を資料として分析を行い、韓国語と日本語の複数形接尾辞の使用範囲の特徴を明らかにすることを目的とする。考察の方法としては、小説の対訳資料と両言語話者に対する意識調査結果を分析する。

まず、前接する人名詞による共起領域の違いと関連して、つぎの2点を明らかにする。

(1) 普通名詞が不特定多数を指示する場合、韓国語では頻繁に複数形接尾辞を後接するが、日本語では複数形接尾辞を後接しない。(2) 集団名詞や準集団名詞に、韓国語ではよく複数形接尾辞を後接するが、日本語ではあまり複数形接尾辞を後接しない。

つぎに、意味解釈における用法の違いと関連して、つぎの2点を明らかにする。

(3) 韓国語の複数形接尾辞「들」は近似複数を表せないが、日本語の複数形接尾辞「たち」は、同質複数と近似複数の両方を表すことができる。(4) 近似複数を表す日本語の「たち」に似通った性質を持つ韓国語の複数形接尾辞に「네」がある。

1. はじめに

本研究では、日本語と韓国語における複数形接尾辞の使用の実態を調査し、その使用範囲においてそれぞれがどのような特徴を持つかを解明する。

日本語と韓国語は、文法的な数のカテゴリを持たないという点で同じであるが¹、両言語の複数形接尾辞の性質はかなり異なる。本研究では、日本語と韓国語の複数形接尾辞の文法的性質の違いをまとめた上で、「文学作品とその対訳を資料とした複数形接尾辞の使用実態調査」と「複数形接尾辞の使い方に関する日本語話者と韓国語話者の意識調査」にもとづく分析を行い、日本語と韓国語の複数形接尾辞の使用範囲をより具体的に浮き彫りにしていく。

分析方法として、まず、小説の対訳資料を用い、日本語と韓国語における複数形接尾辞の出現頻度を調べ、両言語の頻度差にかかわる要因について考察を行う。つぎに、これらの要因が両言語での使用実態にも適合していることを検証するため、両言語話者に意識調査を行い、その調査結果を分析する。具体的な分析の内容は、前接する人名詞による共起領域の違いと、意味解釈における用法の違いの2つである。

2. 日本語と韓国語の複数形接尾辞の文法的性質

日本語では「たち」「ら」「がた」「ども」などの複数形接尾辞があり、それぞれ明確な使用領域

を確保している²。それに比べると、韓国語の複数形接尾辞はバラエティに乏しく、「들」という1つの形式でほとんどの発話での複数表示をまかなっている。しかしながら、韓国語の複数形接尾辞「들」は、日本語の複数形接尾辞「たち」「ら」「がた」「ども」などに比べ、はるかに広い範囲で使われる。

以下の文(1)は、韓国の新聞の『韓国日報』の2000年9月19日付けのインターネット記事から抜き出したものである。ただし、本文中の番号は、便宜上筆者が本稿につけ加えたものであり、(2)は筆者による日本語訳である。

(1) 한국인 4 명 시드니탈옥범들^[1]에 피랍. …(중략)…탈주범들^[2]은 이 차를 몰고 도망가다 현지 경찰들^[3]이 추격해 오자 인질들^[4]을 풀어주고 시드니 인근 매력빌 지역에 차를 버린 후 도주했다. 이 대변인은 인질 4 명중 2 명은 대한체육회 총무임원 윤종구씨 등^[5] 한국선수단 임원들^[6]이고 나머지 2 명은 올림픽자원봉사를 하고 있는 한국인동포인 임신부 등^[7]인 것으로 확인됐다고 말했다. 인질로 잡혔던 윤씨 등^[8]을 상대로 피랍과정을 조사하고 있으며, 임신부는 인근 병원으로 옮겨 치료중이다.

(URL:<http://www.hankooki.com/hankook.htm>)

(2) 韓国人 4 人, シドニー脱獄犯たち^[1]に拉致。…(中略)…脱走犯たち^[2]はこの車での逃走中, 現地の警察たち^[3]が追跡してくると人質たち^[4]を解放し, シドニー近辺のメリクビール地域に車を捨てて逃走した。このスポークスマンは, 人質 4 人中 2 人は大韓体育会総務役員ユン・ジョング氏など^[5] 韓国選手団の役員たち^[6]で, ほかの 2 人はオリンピックボランティア活動をしている韓国人同胞の妊婦など^[7]であると確認されたと伝えた。人質になっていたユン氏など^[8]を対象に拉致の経緯を調査しており, 妊婦は近辺の病院に移送され治療中である。

韓国語の記事(1)の中で注目したい点は、複数形接尾辞の使用が非常に多いということである。この記事日本語に訳した(2)を見てみると、[1][3]では「たち」の使用は不自然であり、[2][4][6]では「たち」は文体的に新聞記事に合わない³。

このように、日本語に比べ韓国語の中で複数形接尾辞が多用されることには様々な要因が考えられる。これに関連して、本節では、先行研究での韓国語複数形接尾辞についての言及にもとづき、日本語と韓国語の複数形接尾辞の文法的性質の違いを考察する。なお、本調査で用いた文学作品の中で、両者の違いが明確に現れる用例を取りあげ、両言語で複数形接尾辞の使用頻度の差を引き起こす要因を探る。以下、大きく5つの項目に分けて述べていく。

第一に、日本語の複数形接尾辞に比べ、韓国語の複数形接尾辞は前接する名詞への制約が少ないということがある。これについては、仁田義雄(1997)も「韓国語には、「들」といった複数指定接辞が存在するが、《複数指定形》は、《人名詞》だけにではなく《物名詞》にも付きうる。…(中略)…複数指定接辞の共起領域が、日本語や中国語に比べて広い。(p. 121)」と述べている。日本語では、名詞の中でも人や生物などの具体的な指示対象を表す名詞でなければ複数形接尾辞が後接できないため、抽象名詞などの数えられない不可算名詞に複数形接尾辞は接続しない⁴。

また、物名詞にも複数形接尾辞が後接しないのが普通である。しかし、韓国語ではこれらの名詞にも複数形接尾辞「들」がつくことが多い。

以下に、小説の対訳資料からの例をあげる。

(3) a それぐらいなら、大した問題なく暮らしていけるだろう。 [アボジ]

b 그만하면 별 문제들 없이 살아갈 수 있을거야. (それぐらいなら、大した問題たちなく暮らしていけるだろう。) [아버지]⁵

(4) a 豆腐料理を出す宿ばかりで、僕も今夜食った。 [キッチン]

b 두부요리 하는 여관들 투성이고 나도 저녁때 먹었어. (豆腐料理をする旅館たちばかりで、僕も夜食べた。) [키친]

前述したように、韓国語は文法的な数のカテゴリを持たないため、(3b)と(4b)で用いられている複数形接尾辞「들」は必要不可欠な要素ではなく、「들」を除いても正文になり何ら問題はない。しかし、韓国語話者にはこれらの文で複数形接尾辞を後接したほうがより自然に感じられる。そのことは、4.で後述する意識調査の結果からも明確である。

第二に、日本語の複数形人称代名詞と違って、韓国語の複数形人称代名詞には複数形接尾辞が後接可能であるということがある。つまり、もともと複数を表す人称代名詞「우리(わたしたち)」や「너희(あなたたち)」にさらに複数接尾辞「들」を後接し、「우리들(わたしたち)」や「너희들(あなたたち)」の形にすることができる。これに関しては、金文京(1989)も「朝鮮語の *uri* (우리) は、依然として複数としても使われるが、複数の意味を明確にしたい場合は、複数語尾 *tul* (들) をつけて、*uritul* (우리들) とする。(p. 68) (〈 〉は筆者注) と述べている。以下に例をあげる。

(5) a 私たち待ってるから。 [アボジ]

b 우리가 기다릴께. (私たちが待ってる。) [아버지]

(6) a 私たちがいけなかったの。 [アボジ]

b 우리들 잘못이야. (私たちの間違いなの。) [아버지]

(5b)では複数形接尾辞が後接していない形式の「우리」が、(6b)では複数形接尾辞が後接している形式の「우리들」が使われているが、その日本語版では両方とも同じく「わたしたち」が用いられている。このような複数形の二重重ねは韓国語では非常に一般的である。

第三に、複数形接尾辞に前接する品詞の許容範囲の違いをあげることができる。これに関連して、朝鮮語学研究会(1987)は「…この-들은体言語尾の後ろにもつき、体言の直後にもつき、副詞の後ろにもつき、また用言の接続形の後ろにさえつきます(p. 241)」と、韓国語複数形接尾辞の共起範囲が非常に広いことについて触れている。

以下にその例をあげる。

(7) a (皆さん) さようなら。

b 안녕히들 가십시오. (《あなたがた》、安寧にお帰り下さい。)

(大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)から引用)

(8) a たんと召し上がれ。 [シュリ]

b 많이들 드시구라. (《あなたがた》, たくさん召し上がって。) [쉬리]

(7b) では「안녕히 (安寧に)」, (8b) では「많이 (たくさん)」に複数形接尾辞「들」が後接している。ここで複数になる対象は、複数形接尾辞に前接している品詞部ではなく、文の表面に表れていない主語や動作主となる複数の人物である。(7b) と (8b) の日本語訳で《 》で示している部分がこれに当たる。

このように、韓国語では、文中に人名詞が明示されていない発話でも、別の品詞に複数形接尾辞「들」を後接することで、指示する人物が複数であることを表すことができる。これらの複数形接尾辞は、名詞のみならず、副詞などの品詞にも接続が可能であり、その傾向は(1)のような新聞記事の文体よりも会話文の中で多く見られる。

第四点として、日本語のような畳語形式が韓国語に多くないということがある。(9)はその一例で、日本語版では畳語の「方々」が用いられているが、韓国語版では「분 (方)」に複数形接尾辞「들」が後接している。

(9) a おたくたちのように成功した方々に、あっしのような無学のものがあれこれ言うのはおかしなもんですが…。 [아보지]

b 맥 들 같이 성공한 분들에게 나같은 무식쟁이가 이런 저런 말을 한다는 게 우습소만…。 (おたくたちのように成功した方たちに、わしのような無学のものがあれこれ言うのはおかしなもんですが…。) [아버지]

なお、これらのほかに、日本語の「たち」に比べ韓国語の「들」は文体を選ばないという点も両言語の複数形接尾辞の頻度差に影響する要素の一つといえるであろう。つまり、日本語の複数形接尾辞「たち」は書きことばより話しことばに多用される傾向があるが、韓国語の複数形接尾辞「들」にこのような文体的な偏りは少ないのである。

以上の考察から、多様な種類を持つ日本語の複数形接尾辞に比べ限られた種類しか持たない韓国語の複数形接尾辞が、より様々な接続形式を持ち、非常に使用範囲も広いということがわかった。

最後の第五点として、韓国語での複数形接尾辞の多用には直接かわりがないが、日本語と韓国語の複数形接尾辞の文法的性質の違いとして「近似複数の用法」を取りあげる。まず、近似複数という用語について述べておこう。近似複数とは、常に同質複数という用語と対立する意味として使われる。以下にその例をあげる。

(10) あなたたちも一緒に行きましょう。 [作例]

(11) 木村さんたちも一緒に行きましょう。 [作例]

同質複数とは、「X+複数形接尾辞」が「複数のX」という意味を表す場合である。また、近似複数とは、「X+複数形接尾辞」が「Xとその他」という意味を表す場合である。たとえば、(10)の「あなたたち」は「複数の「あなた」」という意味を表す同質複数になれるが、(11)の「木村さんたち」は「木村さんとその他」の意味を表す近似複数にしかなれない。

このような日本語での複数形接尾辞の2通りの意味解釈に対して、韓国語の複数形接尾辞「들」はどう対応しているか考察してみよう。

(12) 당신들도 같이 갑시다. (あなたたちも一緒に行きましょう。)

(13) *키무라씨들도 같이 갑시다. (木村さんたちも一緒に行きましょう。)

(12)は(10)の韓国語訳で、(13)は(11)の韓国語訳である。同質複数を表す(12)は適切だが、近似複数を表す(13)は不適切である。つまり、韓国語の複数形接尾辞「들」は近似複数を表せない。

この違いについては、いくつかの先行文献でも言及されている。山越康裕(2001)には「du1 (들)は人称代名詞には接続するが固有名詞には接続せず、(中略)親族名詞に接続しても近似複数の意味にはならないという(金恒汨氏による)。(p.269)」(〈 〉は筆者注)という引用が見られる。さらに、野間秀樹(2002)には「また、「A들」とあれば、必ず「A」と呼び得るものが複数あることを示し、「AとBとC」などの組み合わせを「A들」ということができない点も、日本語とは異なる(p.90)」という記述があり、まさにここで述べる内容についての言及がなされている。

前述した(2)の韓国の新聞記事の日本語訳をもう一度見てみると、この記事の中で近似複数に該当するものは、固有名詞に後接している[5]と[8]、定記述の「妊婦」に後接している[7]である⁶。韓国語の複数形接尾辞「들」は近似複数を表せないため、この記事の韓国語版ではこれらの箇所「など」の意味を持つ名詞「등」が使われていることがわかる⁷。日本の新聞記事であれば、「など」ではなく「ら」が用いられるところであろう⁸。

ここまで取りあげた5つの文法的性質のうちcまでの観点によると、日本語の複数形接尾辞は韓国語の複数形接尾辞「들」に比べて、共起領域が狭く、前接する形式も限られている。しかし、上記の近似複数の用法は、韓国語複数形接尾辞にはない日本語複数形接尾辞のみに見られる明確な特徴の一つである。

以上、日本語と韓国語の複数形接尾辞の文法的性質の違いについて、先行研究にもとづき、5つの観点からまとめてみた。ここからは、分析対象をさらに具体的な言語形式にしぼり、その使用範囲を細かく対照・考察する。とりわけ、各複数形接尾辞とそれらに前接する人名詞とのかかわりに焦点を当ててよりミクロな分析を行なうことで、韓国語とは異なる日本語の複数形接尾辞の特徴が一層顕著になると考える。

3. 文学作品による日本語と韓国語の複数形接尾辞の対照

3.1 調査の概要

本章では、両言語での複数形接尾辞の使用実態を知る一つの手がかりとして、小説の対訳資料の会話文を取りあげ、日本語と韓国語の複数形接尾辞の使われ方にどのような違いが見られるかを考察する。考察の対象は、日本語と韓国語とで対応関係が成立する「人名詞+複数形接尾辞」に限定し、韓国語のみに見られる、物名詞や副詞、複数形人称代名詞などに複数形接尾辞が後接した例は取りあげない。また、日本語についても、「わたしたち、おまえら」「こいつら、あいつ

ら」のような複数形人称代名詞，複数形指示代名詞は，複数形として形式的に固定された形であると考え，考察対象から外す⁹。

さらに，ここでは，分析対象となる人名詞の種類を集団名詞，準集団名詞，普通名詞に三分し，より詳細な考察を試みる。集団名詞とは，日本語の「方々」「人々」などの畳語と，「諸君」「連中」「両親」「一行」「みなさん」など，意味的に複数にしか解釈できない人名詞のことである。準集団名詞とは，「家族」「兄弟」「友達」など，集団全体を指示することも，集団を構成する個体を指示することもできる人名詞のことである。なお，集団名詞と準集団名詞のどちらにも該当しない人名詞をまとめて普通名詞に分類する¹⁰。これらの人名詞の例を以下に示す。

(14) 私ね，びっくりしてその連中の顔を穴のあくほどにらんでやったの。 [サイ]

(15) こんな日は，家族がいたらな，と思ったりはしないか。 [シュリ]

(16) 他の女の子達が都合が悪くてね。 [キッチン]

(14) の「連中」は集団名詞，(15) の「家族」は準集団名詞，(16) の「女の子」は普通名詞の例である。

分析資料としては，日本の小説5冊とその韓国語翻訳版5冊，韓国の小説4冊とその日本語翻訳版4冊で，計18冊の現代小説を使用している。これらの中から「人名詞+複数形接尾辞」の形式が用いられている発話を抽出し，両言語の原作とその翻訳版に表れる複数形接尾辞を同一箇所において比較した。使用した小説については本論の最後に記している。

3. 2 複数形接尾辞の出現頻度の差

まず，小説の日本語版での「人名詞+複数形接尾辞」の形式に対して，韓国語版ではどのような形式が対応しているかを調べた。その詳細を表1に示す。

表1 日本語版の複数形接尾辞に対応する韓国語版の形式

		韓国語版				合計
		普通名詞 +들	普通名詞	普通名詞 +네	集団名詞	
日本語版	普通名詞+たち	113	9	2	1	125
	普通名詞+ら	13	2	0	0	15
	普通名詞+ども	14	0	0	0	14
合計		140	11	2	1	154

この表から，日本語版に表れた複数形接尾辞の形式は「普通名詞+たち」「普通名詞+ら」「普通名詞+ども」の3種で，これらに対応する韓国語版の形式としては，「普通名詞+들」「普通名詞」「普通名詞+네」「集団名詞」の4種があることがわかる。たとえば，日本語版の「普通名詞+たち」の形式が韓国語版ではどのような形式に訳されているか，以下に具体例をいくつか取りあげる。

(17) a もし，結核患者たちが天然痘の攻撃をまともに受けていたら， [リング]

b 만일 결핵 환자들이 천연두의 공격을 정면으로 받았더라면，(もし，結核患者たちが天然痘の攻撃を真っ正面から受けていたら) [링]

- (18) a 母たちは娘に自分たちのように生きてはいけないといいながら, [サイ]
 b 우리의 어머니들은 딸들에게는 자신과 다른 생을 살라고 가르쳤고, (我々の母たちは娘たちには自分と異なる人生を生きろと教えて) [무소]
- (19) a けど, おばさん達は, 身投げと思わはったんです。 [一月]

11

- b 하지만 아줌마네는 언니가 스스로 몸을 던졌다고 생각했지요. (けど, おばさんたちは姉さんが自分で身を投げたと思ったんです。) [달]
- (20) a 明け方から探しに出たはったおばさん達が, 偶然見つけはったそうで, [一月]
 b 새벽부터 딸을 찾으러 나갔던 아줌마 일행이 우연히 발견했다고 하대요. (明け方から娘を捜しに出ていたおばさん一行が偶然発見したんだそうです) [달]

日本語版の「普通名詞+たち」に対応する韓国語版の形式のうち, (17) の「환자들 (患者たち)」は「普通名詞+들」, (18) の「자신 (自分)」は「普通名詞」, (19) の「아줌마네 (おばさんたち)」は「普通名詞+네」, (20) の「일행 (一行)」は「集団名詞」の例である。

全体を見ると, 日本語版では「たち」が 125 例, 「ら」が 15 例, 「ども」が 14 例で, 合わせて 154 例の複数形接尾辞が集計された。なお, これらの複数形接尾辞に前接する人名詞はすべて, 前述した 3 分類のうち普通名詞に該当するもののみであった。

合計 154 例のうち 140 例が韓国語版の「들」と対応しており, これは全体の 91% になる。この結果からも, 韓国語の中で使われる複数形接尾辞は「들」に集中していることがわかる。なお, 日本語版では複数形接尾辞が明示されているのに, 韓国語版では複数形接尾辞が明示されず普通名詞のみの形式になっているのが 11 例あって, これは全体の 7% である。

さらに, ここで注目したいのは, 日本語版での「たち」が韓国語版で「들」ではなく「네」に対応している例が, 上記の (19) を含めて 2 例見られていることである。少数ではあるが, これは韓国語の「들」とは異なる用法を持つ, 日本語複数形接尾辞「たち」の特徴の一面を覗かせる貴重な用例である。この韓国語の複数形接尾辞「네」については, 5. で詳しく考察する。

つぎに, 韓国語版での「人名詞+複数形接尾辞」の形式に対して, 日本語版ではどのような形式が対応しているかを調べた。その詳細を表 2 に示す。

表 2 韓国語版の複数形接尾辞に対応する日本語版の形式

		日本語版							合計
		普通名詞	普通名詞+たち	集団名詞	不完全集団名詞	普通名詞+ども	普通名詞+ら	疊語	
韓国語版	普通名詞+들	282	113	36	0	14	13	4	462
	集団名詞+들	6	0	17	0	0	0	0	23
	準集団名詞+들	0	0	2	21	0	0	0	23
	普通名詞+네	0	2	0	0	0	0	0	2
合計		288	115	55	21	14	13	4	510

韓国語版では, 「들」が 508 例, 「네」が 2 例で, 合わせて 510 例の複数形接尾辞が集計された。

「들」の場合, 前接する人名詞の種類によって, 「普通名詞+들」「集団名詞+들」「準集団名詞+

들」の3種に分けられ、「네」は2例とも「普通名詞+네」の形式になっている。これら4種の形式に対応する日本語版での形式は「普通名詞」「普通名詞+たち」「集団名詞」など計7種である。表1での「日本語版の3種の形式を韓国語版では4種の形式で対応している」という結果に比べると、日本語版での複数を表す形式が韓国語版より多彩であることがわかる。

具体的には、まず、韓国語版では複数形接尾辞が用いられているのに、日本語版では複数形接尾辞が用いられず普通名詞のみの形式になっているのが288例で全体の57%になり、対応形式の中でもっとも高い比率を占めている。表1の日本語版の複数形接尾辞に対応する韓国語版の形式で、普通名詞のみの例がわずか7%であったのに比べると、日本語版より韓国語版のほうで複数形接尾辞が多く使われていることは明らかである。

また、集団名詞が55例で全体の11%、準集団名詞が21例で全体の4%を占めており、表1で韓国語版の集団名詞が1例しかなかったことに比べるとかなり高い数値である。このように複数形接尾辞を使わず、集団名詞、準集団名詞だけで複数であることを示している例まで含めると、日本語版での複数形接尾辞の非後接率は非常に高い。

これらの結果から、韓国語では、複数の意味を含める人名詞にも複数形接尾辞を後接する傾向が強いが、日本語では、人名詞そのものが複数の意味を含めるものなら複数形接尾辞を後接しないのが普通であるということが明らかになった。

ちなみに、表2で韓国語版の複数形接尾辞にもっとも多く対応している日本語版の複数形接尾辞の形式が「たち」であることから、「たち」は「ら」や「ども」などに比べ使用範囲が広い接尾辞であることがわかる。このほかに、表1ではまったく見られなかった「疊語」が4例見えているのも、日本語版ならではの特徴であろう。

表1と表2を比較すると、両言語での複数形接尾辞の使用頻度と使用範囲の違いは明瞭である。この結果にもとづいて、3.3では両言語の複数形接尾辞の使用上の相違について、前接する人名詞の種類別に詳しく考察する。

3.3 複数形接尾辞の非後接と他形式との交代

表1と表2の分析結果から、3つの形式を考察の基準として立てることができる。それは、「普通名詞+複数形接尾辞」、「集団名詞+複数形接尾辞」、「準集団名詞+複数形接尾辞」である。

まず、「普通名詞+複数形接尾辞」の形式について考察する。表1で、日本語版の「普通名詞+複数形接尾辞」が韓国語版で「普通名詞のみ」に対応している例が11例(7%)あった。一方、表2で、韓国語版の「普通名詞+複数形接尾辞」が日本語版で「普通名詞のみ」に対応している例は282例(61%)で、その差は非常に大きい。

これに関連した例は、以下のようなものである。

(21) a 一般の人も泊まれるんですか。 [リング]

b 호텔이나 임대별장에 일반 사람들도 묵을 수 있나요? (호텔や賃貸別荘に一般の人たちも泊まれるんですか。) [링]

(22) a いまどきの子どもはろくなことをしなくなった。 [新美]

- b 요즈음 아이들은 영 글러먹었어. (いまだきの子どもたちはまったくろくでもない。)
[금빛]

以上の例をみると、日本語では単数形の普通名詞で示しているところを、韓国語では「普通名詞+들」で対応している。(21a)の「人」と(22a)の「子ども」は、文脈上不特定多数の対象を指示するという面で共通している。このように不特定多数の対象を指示する場合、韓国語ではできるだけ複数形接尾辞を後接し、指示対象が複数であることをより明確に示そうとする傾向が強い。しかし、日本語では、(21b)の「일반 사람들 (一般の人たち)」や(22b)の「요즈음 아이들 (いまだきの子どもたち)」のような複数形接尾辞の使い方は余計な感じがするだろう。このような両言語間の使用上の違いが、前述した表1と表2での頻度差を生み出す一つの要因になっていると考えられる。

つぎに、「集団名詞+複数形接尾辞」の形式について考察する。以下にいくつかの例をあげる。

- (23) a 今日、出版社の連中に聞いたんだ。 [사이]

- b 오늘 출판사 사람들한테 물어봤어. (今日、出版社の人たちに聞いてみた。)
[무소]

- (24) aまさに、新たな時代は諸君の双肩にかかっている。 [슈리]

- b 바로 그 새 역사의 시작이 대원들 손에 달렸다. (まさに、その新しい歴史の始まりが隊員たちの手にかかっている。)
[쉬리]

以上の例を見ると、日本語版では「連中」「諸君」という集団名詞が用いられているのに対し、韓国語版では「普通名詞+들」の形式が用いられている。表2の結果でもこのような傾向は顕著で、日本語版で集団名詞になっている55例のうち、66%に当たる36例が韓国語版では「普通名詞+들」であった。よって、韓国語版では集団名詞だけで複数を示すより、普通名詞に複数形接尾辞を後接して複数を示すほうが好まれると考えられる。

しかし、韓国語で集団名詞をまったく用いないということではない。以下はその例である。

- (25) a ご両親は元気だったかい。 [사이]

- b 부모님들 안녕하시지. (ご両親たちはお元気でしょう。)
[무소]

- (26) a きっとみんな喜ぶよ。 [螢]

- b 모두들 기뻐할거야. (皆さんたち, 喜ぶよ。)
[개똥벌레]

(25)と(26)では、韓国語版でも集団名詞の「부모님(ご両親)」「모두(皆さん)」が用いられているが、それに加えてさらに複数形接尾辞「들」が後接している。このように、韓国語では、集団名詞に再び複数形接尾辞が後接するのはよくあることで、まったく違和感なく用いられる形式である。一方、日本語では、集団名詞が用いられるときに複数形接尾辞が後接しないのが普通であり、「たち」や「ら」などを加えると不適切な文になりがちである。

韓国語で複数形接尾辞の後接の傾向が強く見られるのは、前述したように複数の意味をより明確にするためであると考えられる。これは、複数形人称代名詞に重ねて複数形接尾辞「들」を後接した「우리들(私たち)」「너희들(君たち)」のような形式と同じ役割を果たしている。

つぎに、「準集団名詞+複数形接尾辞」の形式について考察する。

(27) a 友だちもみんなこのクロイツベルクに住んでいる。 [蚩]

b 친구들도 모두 이 크로イツ베르크에 살고 있구요. (友達たちもみんなこのクロイツベルクに住んでいるんです。) [개똥벌레]

(28) a こんな日は、家族がいたらな、と思ったりはしないか。 [슈리]

b 이런 날 가족들 생각 안 나? (こんな日、家族たちのこと思い出さないか。) [쉬리]

ここでは、「友だち」と「家族」が準集団名詞として用いられているが、これらの名詞は前述した集団名詞とは異なって、指示対象が必ず複数であるわけではない。よって、複数形接尾辞が後接すると必ず不適切になるわけではなく、実際には「友達ら」などの表現もありえる¹²。しかしながら、これらの名詞は複数形接尾辞によって単数と複数が区別されるのではないため、日本語ではほとんどの場合、複数形接尾辞が後接していない形式で単数と複数の両方を表す。

一方、韓国語では、このような準集団名詞にもできるだけ複数形接尾辞が用いられる。とりわけ、(27b)の「친구(友だち)」には複数形接尾辞が後接しないと単数の意味として捉えられやすく、発話の意味が曖昧になる。

以上、日本語と韓国語の小説の中で複数形接尾辞の形式にずれが見られる箇所を焦点を当て、その頻度差と共起領域の違いについて考察を行なった。この考察から、日本語に比べて、韓国語で複数形接尾辞の使用頻度が高いことが再び確認された。なお、その要因として、韓国語では「集団名詞」や「準集団名詞」などにもできるだけ複数形接尾辞を後接しようとする傾向が強く、日本語に比べその共起領域が広いからだということが明らかになった。

4. 意識調査による日本語と韓国語の複数形接尾辞の対照

4. 1 調査の概要

3. での文学作品の分析結果により、日本語での複数形接尾辞の使用頻度が韓国語のそれに比べて低いことが明らかになった。さらに、この結果にもとづいて、日本語と韓国語の複数形接尾辞の頻度差にかかわる要因についても考察を行った。しかし、これは、あくまでも文学作品という限られた範囲での結果であり、収集された標本数にも限りがあった。そのため、この結果についての裏付け調査の必要があると判断し、日本語話者と韓国語話者に意識調査を行った。ここでは、3. で明らかになった両言語の複数形接尾辞の頻度差を、日常の言語使用の実態として検証する。

以下に、今回の意識調査の内容について、簡単にまとめておく。

1) 調査期間：2001年10月～11月

2) 調査対象：日本語話者 575人(男性 247名, 女性 328名)と韓国語話者 431人(男性 139名, 女性 292名)の合計 1006人。

3) 調査地域：日本語話者に対する調査は、東京を中心とした関東地域と大阪を中心とした関西地域で行った。一方、韓国語話者に対する調査は、ソウルを中心とした京畿道地域と江陵を中心とした江原道地域で行った。

4) その他：インフォーマントの年齢層は中学生以上に限定した。なお、韓国語話者の場合、

日本語学習歴がないか2年以下であること、日本に長期滞在の経験がないことを条件とした。これは、日本語能力の高い人や日本に長期滞在した経験がある人の場合、日本語が母語である韓国語に影響を与える可能性があるかと判断したからである¹³。

4. 2 普通名詞と複数形接尾辞との共起

ここでは、「普通名詞+複数形接尾辞」の形式に対する日本語話者と韓国語話者の意識について考察する。調査の方法は、日本語話者には日本語で、韓国語話者には韓国語で、同じ内容の発話を提示し、発話中の□に入る形式として「普通名詞のみ」と「普通名詞+複数形接尾辞」のうち、どちらを選択するかを調べるものである。なお、インフォーマントの負担を少なくするため、上の2種の選択肢のほかに「どちらでも良い」という選択肢も加えている。以下の場面1がその詳細で、「若者」という普通名詞が不特定多数を表す発話になっている。

【場面1】

日本語版：一人の老人が自分の孫に次のように話します。

「最近の□は年寄りを敬う気持ちがないんだ」

1. 若者 2. 若者たち 3. 1と2どちらでも良い

韓国語版：한 노인이 손자에게 이야기하고 있습니다.

“ 요즘 □은(는) 노인을 공경할 줄 몰라서 걱정이야.”

1. 젊은이 2. 젊은이들 3. 1과 2 둘 다 좋다

調査の結果を図1に示す。

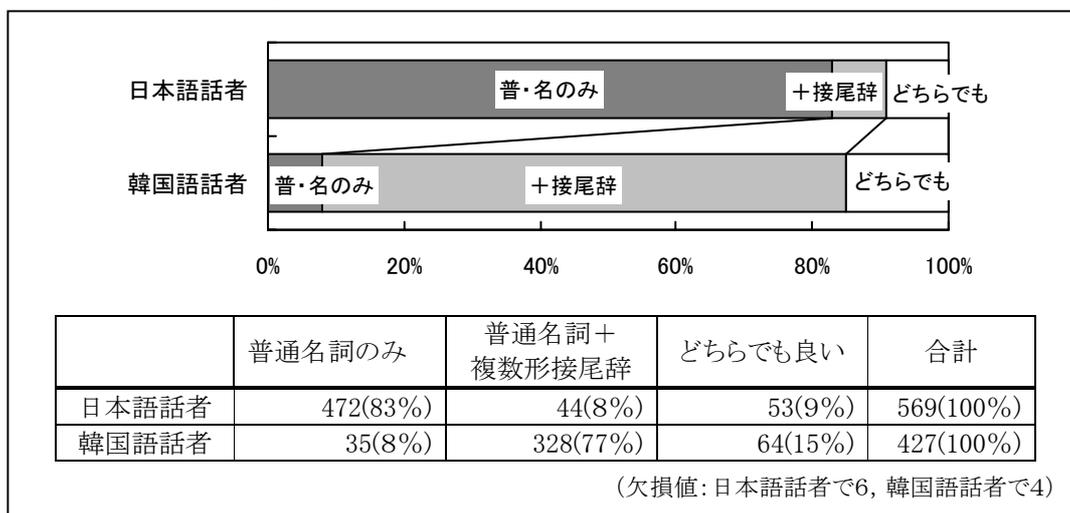


図1 両言語話者における「普通名詞+複数形接尾辞」の選択数

日本語話者では、「普通名詞のみ」の形式を用いるという回答がもっとも多く83%の回答率である。一方、韓国語話者では、「普通名詞+複数形接尾辞」の形式を用いるという回答がもっとも多く77%の回答率である。両言語話者の間でまったく反対の結果となっており、その数値の差は非常に大きい。この結果は、 χ^2 検定により0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2_{(2)}=586.2$, $p<.001$)。

以上のことから、普通名詞を用いて不特定多数を指示する発話の場合、日本語話者はできるだ

け複数形接尾辞を後接せず、韓国語話者はできるだけ複数形接尾辞を後接するという傾向が検証された。

4. 3 集団名詞と複数形接尾辞との共起

ここでは、「集団名詞+複数形接尾辞」の形式に対する日本語話者と韓国語話者の意識について考察する。

調査の方法は基本的に場面1と同様であるが、ここでは、「観衆」という集団名詞を例として取りあげ、「集団名詞のみ」と「集団名詞+複数形接尾辞」のうち、インフォーマントがどちらを多く選択するかを調べる。以下の場面2がその詳細である。

【場面2】

日本語版：オリンピック競技を中継しているアナウンサーのコメントです。

「競技場では大勢の□□が手を振って応援しています」

1. 観衆 2. 観衆たち 3. 1と2どちらでも良い

韓国語版：올림픽 경기를 중계하고 있는 아나운서가 다음과 같이 말합니다.

“ 경기장에서는 많은 □□이 손을 흔들며 응원하고 있습니다.”

1. 관중 2. 관중들 3. 1과 2 둘 다 좋다

調査の結果を図2に示す。

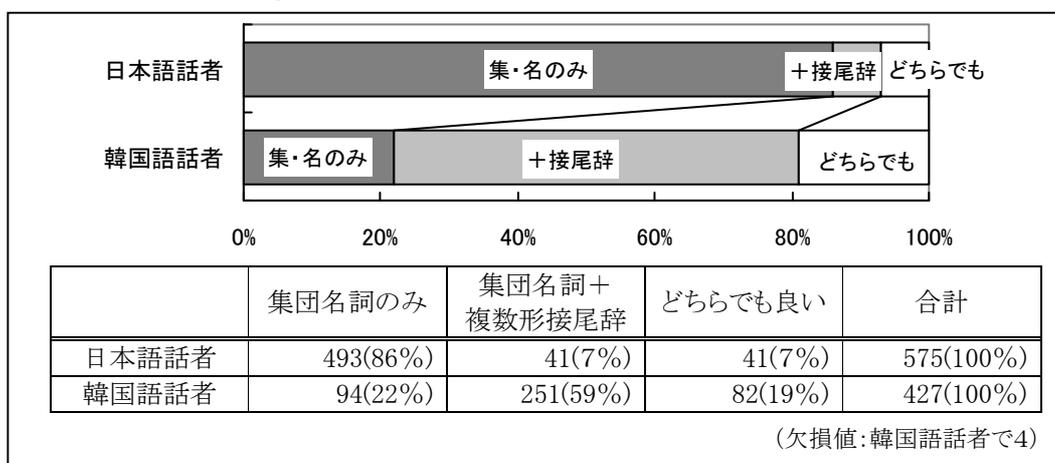


図2 両言語話者における「集団名詞+複数形接尾辞」の選択数

日本語話者では、「集団名詞のみ」の形式を用いるという回答がもっとも多く86%の回答率である。一方、韓国語話者では、「集団名詞+複数形接尾辞」の形式を用いるという回答がもっとも多く59%の回答率である。表3の結果と同じく両言語話者の間で反対の結果となっており、その数値の差もかなり大きい。この結果は、 χ^2 検定により0.1%水準で有意差が認められた($\chi^2_{(2)}=423.3, p<.001$)。

以上のことから、集団名詞を用いる際に、日本語話者はできるだけ複数形接尾辞を後接せず、韓国語話者はできるだけ複数形接尾辞を後接するという傾向が検証された。

ここで、もう1つ注目すべきことは、図1の普通名詞の結果と、図2の集団名詞の結果の比較である。以下の図3にその内容を示す。

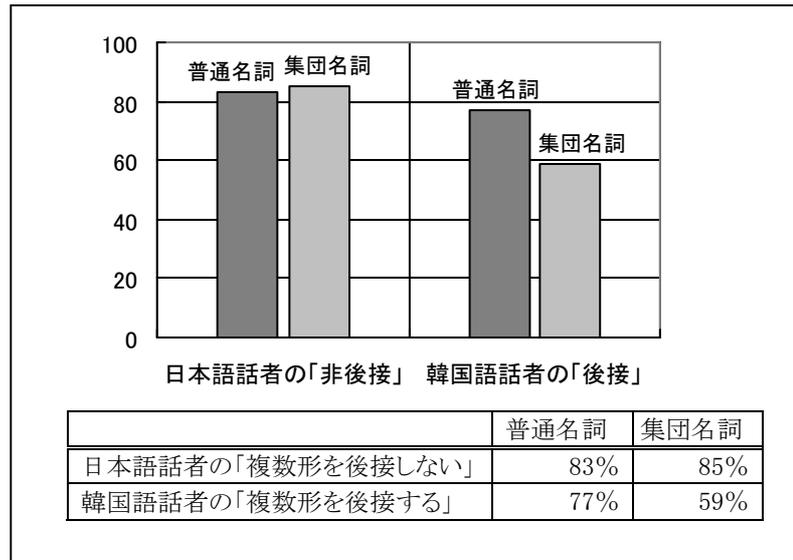


図3 複数形接尾辞との共起関係における「普通名詞」と「集団名詞」の比較

図3からみると、日本語話者の場合、回答率をもっとも高いのは普通名詞の結果でも集団名詞の結果でも「複数形接尾辞を後接しない」で、普通名詞 83%、集団名詞 85%である。両者の間に大きな差はない。一方、韓国語話者の場合、回答率をもっとも高いのは両者とも「複数形接尾辞を後接する」で、普通名詞 77%、集団名詞 59%であり、かなりの差が見られる。この数値的な差に関連して韓国語話者の回答をさらに細かく見てみると、「どちらでも良い」という回答は15%と19%でそれほど差がないのに対し、「普通名詞のみ (8%)」と「集団名詞のみ (22%)」でかなりの開きがあることがわかる。

この結果から、日本語話者では、前接する名詞が普通名詞でも集団名詞でも、複数形接尾辞との共起意識はそれほど変わらないのに対し、韓国語話者では、前接する名詞の種類が複数形接尾辞との共起意識に影響を与えていることがわかる。これには、場面2で提示した「관중 (観衆)」のように、もともと語そのものが複数を表す集団名詞より、場面1で提示した「젊은이 (若者)」のように、文脈でしか複数と判断できない普通名詞のほうに、より積極的に複数形接尾辞を後接しようとする韓国語話者の傾向が表れている。

5. 韓国語の複数形接尾辞「네」について

ここでは、複数形接尾辞「들」とともに、もう1つの韓国語の複数形接尾辞である「네」の近似複数としての用法について考察する。

2. で、日本語と韓国語の複数形接尾辞の文法的性質の違いと関連して、近似複数の用法について述べた。日本語の複数形接尾辞が同質複数と近似複数の両方を表すことができるのに対し、韓国語の複数形接尾辞「들」は近似複数の用法を持たないため、名前などの固有名詞や定記述には後接できないということである。3. 2の表1の分析で示した用例(20)はその一例である。日本語文の「おばさんたち」では、複数形接尾辞「たち」が近似複数の意味で用いられているのに対して¹⁴、その韓国語訳では複数形接尾辞の代わりに集団名詞「일행 (一行)」が用いられて

いる。これは、韓国語の複数形接尾辞「들」に近似複数の用法がないことに起因する。

韓国語でもっとも一般的な複数形接尾辞は「들」であり、これがほとんどの複数概念を表している。「네」は「들」に比べて非常に使用範囲が狭い複数形接尾辞で、単純に指示対象を複数化するというより、家族など同種のグループを表すという意味が強く、「들」とはその用法において若干異なる部分がある¹⁵。大阪外国語大学朝鮮語研究室（編）（1986）には、「들」と「네」の意味的な違いについて、「들은数に対する指示であり，네は基本的な利害を共通にする仲間内という団体指示であるといえる。（p. 733）」という記述が見られる。このように、「들」に比べると使用範囲に制約が多い「네」だが、文学作品の分析結果をよく見ると、「네」に関して興味深い事実が見出せる。

文学作品の分析結果の表1の中で、日本語版の「たち」が韓国語版で「들」ではなく「네」に対応しているものが2例あったが、ここで、もう一度その例をあげる。

(19) a けど, おばさん들은, 身投げと思わはったんです。 [一月]

b 하지만 아줌마네는 언니가 스스로 몸을 던졌다고 생각했지요. (けど, おばさんたちは姉さんが自分で身を投げたと思ったんです。) [달]

(19a) の日本語文だけでは、「おばさん達」が指す指示対象がどのような集まりなのか明確ではない。つまり、指示対象全員が「おばさん」という値を持っている同質複数にも、「おばさん」と呼ばれる1人を代表とする近似複数にも解釈が可能である。一方、(19b) の韓国語文での「아줌마네」は、「おばさん家」、または「おばさんの家族」の意味合いが強く、近似複数の解釈しか持たない。以下の例を見るとより明瞭である。

(29) a おばさん들은, お滝さんが子を孕んではる云う話は, 一応秘密にしてはったんです
けど, [一月]

b 아줌마네 식솔들은 다키 언니가 애를 가졌다는 이야기는 일체 비밀로 했지만 (おばさんたちの家族たちは, 滝姉さんが子を孕んだことは一切秘密にしたけど) [달]

(29b) の韓国語文の日本語訳を見ればわかるように、韓国語での「人名詞+네」は「家」や「家族」という意味が強い。このように、その使用場面においてバラエティに乏しいにもかかわらず、(19b) と (29b) から見ると、韓国語複数形接尾辞「네」は、「들」に代わって近似複数を表す役割を担っている複数形接尾辞であると判断できる。

以上の文学作品での用例の考察をもとに、以下では、韓国語話者に行なった意識調査結果について述べていく。これにより、韓国語の複数形接尾辞「들」が近似複数に使われにくいということと、「네」が「들」の代わりに近似複数の用法を持つということ、言語使用の実態として検証する。

調査の方法は、近似複数しか表せない「固有名詞+複数形接尾辞」の形式として、質問1では「창호씨들 (チャンオさんたち)」、質問2では「창호씨네 (チャンオさんたち)」を取りあげ、こ

これらの発話に対し、インフォーマントがどの程度違和感を持つのか、4段階の容認度レベルから選択してもらうことにした。本項目は、韓国語話者にだけに行った調査である。そのため、以下の韓国語版の中には、実際の調査用紙とは異なるが、便宜上日本語訳をつけ加えている。

【質問1】

대표자가 창호씨인 모임의 사람들을 통 털어서 이야기할 때 “ 창호씨들” 이라고 말한다.
(チャンオさんが代表者である集まりの人たちをひっくりかえすとき、「チャンオさんたち(들)」という。)

예) 창호씨들도 함께 가지죠. (例) チャンオさんたち(들)も一緒に行きましょう。)

【質問2】

대표자가 창호씨인 모임의 사람들을 통 털어서 이야기할 때 “ 창호씨네” 라고 말한다.
(チャンオさんが代表者である集まりの人たちをひっくりかえすとき、「チャンオさんたち(네)」という。)

예) 창호씨네도 함께 가지죠. (例) チャンオさんたち(네)も一緒に行きましょう。)

本項目で選択肢として提示した容認度レベルは、「まったく違和感がない」「それほどの違和感はない」「若干違和感がある」「非常に違和感がある」の4つである。調査の結果を図4に示す。

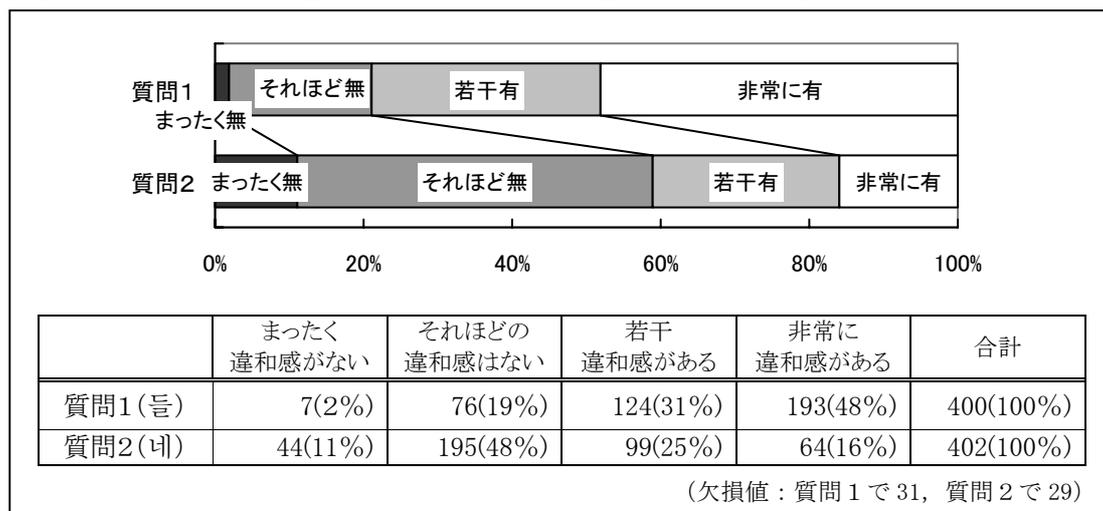


図4 韓国語話者の複数形接尾辞の近似複数としての使用に対する違和感度

質問1(들)では「非常に違和感がある」という回答が、質問2(네)では「それほど違和感はない」という回答がもっとも多い。質問1の複数形接尾辞「들」の場合、「若干違和感がある」「非常に違和感がある」を合わせて、79%のインフォーマントが近似複数としての使用について違和感を持っている。これに比べ、質問2の複数形接尾辞「네」の場合、「まったく違和感がない」「それほどの違和感はない」を合わせて、59%のインフォーマントが「違和感がない」と回答している。この結果から、韓国語でもっとも一般的な複数形接尾辞といわれる「들」より、狭い範囲でしか使われない「네」のほうが、近似複数を表しやすいということが明らかになった。

しかし、前述したように、「네」の使用にはある程度満たすべき条件がある。(19)と(29)の例でも触れたように、「네」が指す指示対象は「家」や「家族」、「組織」などに限られ、常に団体指示でなければならない。今回の意識調査でも、備考欄に「「네」は家族でないと使えない」「そ

の集まりが家族なら、「네」使用に違和感はない」とコメントしたインフォーマントが多数見られた。

6. まとめ

以上、文学作品と意識調査の分析結果にもとづき、日本語の複数形接尾辞を韓国語と対照・考察した。これによって、日本語の複数形接尾辞の特徴と韓国語との相違点が明らかになった。

まず、日本語での複数形接尾辞の使用頻度が、韓国語でのそれに比べ非常に低いということがいえる。これは前接する人名詞によって両言語の複数形接尾辞の共起領域が異なるからである。これについての結果は、つぎの2点にまとめることができる。

- (1) 普通名詞が不特定多数を指示する場合、韓国語ではできるだけ複数形接尾辞を後接し、それらが複数であることを形式的に明確にしようとする傾向が強い。しかし、日本語では複数形接尾辞を後接しないことが多い。
- (2) 韓国語の場合、集団名詞や準集団名詞にもできるだけ複数形接尾辞を後接するが、日本語の場合、このような人名詞には複数形接尾辞を後接しないのが普通である。

また、韓国語の複数形接尾辞とは異なる日本語の複数形接尾辞の特徴として近似複数の用法がある。この用法についての結果は、つぎの2点にまとめることができる。

- (3) 韓国語でもっとも一般的な複数形接尾辞である「들」は近似複数を表せない。しかし、日本語の複数形接尾辞「たち」は、同質複数とともに近似複数も表すことができる。
- (4) 「들」の代わりに、韓国語で近似複数を表しやすい複数形接尾辞として「네」がある。しかし、これはあくまでも家族などの団体指示に使われる複数形接尾辞であり、非常に限られた範囲でしか用いられない。

今回の考察により、以上の4点が、日本語と韓国語の複数形接尾辞の共起領域と用法における相違点として明らかになった。

以上のように、日本語と韓国語の複数形接尾辞は、共通点以上に多くの相違点を持っている。本論では、「人名詞+複数形接尾辞」のみを実質的な分析の対象としているが、今後は、さらに考察の範囲を広げ、人名詞以外の品詞に複数形接尾辞が接続する形式についても、具体的な調査と分析をする必要があると考える。

¹ 仁田義雄 (1997) は、「英語などの可算名詞が、〈数〉といった文法カテゴリを有し、《単数形》か《複数形》かの、いずれかとして存在せざるをえなかったのに対して、日本語の名詞は、それが指し示す指示対象の数的異なりによって、自らの形態を変えることは、通例ない。(p.108)」と述べている。

² これに関連して、野元菊雄 (1978) はつぎのように述べている。「「がた」というのは、目上の人について使うのが普通でありましょう。「先生がた」などというように。これに対して「たち」や「ども」は、自分の側についていることが多いようです。自分の側に属していなくても、話し相手よりも低く待遇しているものについて使います。そのうち「たち」はそれでもそうそのものを低めてはいないで、低めてはいるものやや中立的となります。これに対して「ども」はもっと、それがついてるものを低めるといふ機能を持っていますから、自分の側についているときは謙讓語と結びつく率が高くなります。… (中略) …そのほかに「ら」というものもあります。「たち」と似たところがあると思います。

(pp. 17-18)」

³ この判断については、日本語母語話者3人に口頭によるサンプル調査を行い、同様の回答が得られた。なお、[5] [7] [8] での、日本語の「など」に当たる「등」の使用も特徴的であるが、これは後述する複数形接尾辞の近似複数の用法と深く関わっており、そこで詳しく述べる。

⁴ 最近では、日本語でも歌謡の歌詞などで「夢たち」「思い出たち」など抽象名詞に複数形接尾辞を後接する形が見られるようになった。しかし、文化庁(編)の『言葉に関する問答集5』(1979)では、「これら/それら/あれらなどのように、一部の事物を表す代名詞につけて、その表しているものが複数であることを表す。(p. 50)」として人称詞でない代名詞に「ら」が後接できることは示しているものの、抽象名詞に後接できるという記述はまだ見られない。

⁵ 各用例の韓国語文の()部の日本語訳は筆者による逐語訳である。

⁶ 「定記述」という用語は田窪行則(1997)の定義による。親族名詞や身分名、職業名、職位名など、人称代名詞と固有名詞を除いた人称詞を総称する。

⁷ 韓国語の文法では、「등」は接尾辞ではなく、不完全名詞として分類される。

⁸ この判断に関しても、注3で示したように、口頭による日本語母語話者へのサンプル調査を行った。

⁹ 日本語の人称代名詞については、すでに鄭惠先(2003)で様々な側面から考察を行っており、その中で韓国語の人称代名詞との対照も行っているため、複数形接尾辞のみを考察対象とした本稿では特に扱わないことにする。

¹⁰ 集団名詞、準集団名詞、普通名詞という用語は、今回の日本語と韓国語の複数形接尾辞の対照にあたって、前接する人名詞を区分するために本稿で独自に名付けたものである。基本的には、言語学用語のnoun of multitude(群集名詞), simple collective noun(単純集合名詞), common noun(普通名詞)の定義にもとづいているものの、必ずしも西欧言語でのこれらの区分と一致する用語ではないことをあらためて断っておきたい。

¹¹ 今回分析対象とした小説の中には方言形式が含まれる作品が1作あったが、本研究で考察対象としている言語形式とは直接かかわりがないと判断したため、あえて取り除くことはしなかった。

¹² 「友達ら」という表現は、関東ではそれほど頻繁に使われていない表現だが、関西のほうではよく耳にする形式であり、若干方言的な性質を持っていると考えられる。

¹³ 日本語話者の場合は、このような条件をつけ加えなかった。その理由としては、日本語話者が韓国語に接する機会が、韓国語話者が日本語に接する機会に比べてはるかに少ないということ、筆者の日本での韓国語教育の経験により、若干の学習経験や生活経験があっても、母語に影響を与えるほどの段階にはいたらないと判断したことがある。

¹⁴ 用例(20a)が近似複数であることは、本用例の前に出てくる以下のような発話が根拠となる。「これには、家族は愚か、ここの者から、偶々旅籠に泊ってはったお客さんまで、みんな心配しまして、夜中に松明を持って、この辺り一帯を探して回ったんです。」

¹⁵ 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)では、「-네」の説明に、「①(同種の人)の団体・群れを表す語)…たち, …ら: 우리~われら, 僕たち; 부인~夫人たち。②(人の名まえや称号についてその人の)家族; 所: 영남이~ヨンナミの家族(所)(p. 482)」と記されている。

分析資料 ([]は略語)

- [蛍] 村上春樹『蛍・納屋を焼く・その他の短編』, 新潮社, 1987
- [개똥벌레] 村上春樹『개똥벌레 헛간을 태우다 그 밖의 단편』(권남희訳), 창해, 2000
- [キッチン] 吉本ばなな『キッチン』, 福武書店, 1988
- [키친] 吉本ばなな『키친』(김난주訳), 민음사, 1998
- [新美] 新美南吉『新美南吉童話集』, 岩波書店, 1996
- [금빛] 新美南吉『금빛여우』(조양옥訳), 현대문학북스, 2001
- [リング] 鈴木光司『リング』, 角川書店, 1998

-
- [링] 鈴木光司『링』(윤덕주訳), CNC MEDIA, 1998
- [一月] 平野啓一郎著『一月物語』, 新潮社, 1999
- [달] 平野啓一郎『달』(양윤옥訳), 문학동네, 1999
- [영웅] 이문열『우리들의 일그러진 영웅』, 민음사, 1992
- [英雄] 이문열『われらの歪んだ英雄』(藤本敏和訳), 情報センター出版局, 1992
- [아버지] 김정현『아버지』, 문이당, 1996
- [アボジ] 김정현『アボジ』(田嶋きよ子他訳), 双葉社, 1998
- [무소] 공지영『무소의 뿔처럼 혼자서 가라』, 푸른숲, 1998
- [サイ] 공지영『サイの角のようにひとりで行け』(石坂浩一訳), 新幹社, 1998
- [쉬리] 정석화『쉬리』, 한국출판협동조합, 1999
- [シュリ] 정석화『シュリ』(金重明訳), 文芸春秋, 1999
- 『韓国日報』, 2000年9月19日, URL:<http://www.hankooki.com/hankook.htm>

引用文献

- 梅田博之(1989)「朝鮮語」『言語学大辞典 第2巻』三省堂
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室(編)(1986)『朝鮮語大辞典』角川書店
- 金文京(1989)「人称代名詞の転位について」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』21, pp. 51-74, 慶應義塾大学言語文化研究所
- 田窪行則(1997)「日本語の人称表現」, 田窪行則(編)『視点と言語行動』pp. 13-44, くろしお出版
- 朝鮮語学研究会(編著)菅野裕臣(監修)(1987)『朝鮮語を学ぼう』三修社
- 鄭惠先(2003)『日本語人称詞の社会言語学的研究』博士学位論文(大阪府立大学)
- 仁田義雄(1997)『日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—』くろしお出版
- 野間秀樹(2002)『至福の朝鮮語(改訂新版)』朝日出版社
- 野元菊雄(1978)「日本語の性と数」『言語』7-6, pp. 14-19, 大修館書店
- 文化庁(編)(1979)『「ことば」シリーズ 11 言葉に関する問答集 5』, 大蔵省印刷局
- 山越康裕(2001)「モンゴル語および近隣諸言語の複数接尾辞と名詞句階層」『日本言語学会第123回大会予稿集』pp. 266-271, 日本言語学会

Comparison of Plural Suffixes Between Japanese and Korean Languages: Analyzing their context and usage in works of literature and verifying the findings with questionnaire surveys

Keywords: common personal noun; personal noun of multitude; simple collective personal noun; normal plural; plural of approximation

This study reveals the differences in context and usage of plural suffixes in the Japanese and Korean languages. The fundamental data were obtained from works of literature in both languages and the findings were reinforced with questionnaire surveys. Firstly to clarify the differences in context in which plural suffixes appear, the frequency and translation in literary works was investigated. In the next step, a questionnaire-survey of the native speakers' intuition of both languages was conducted to verify that the contexts mentioned above matched with the real usage.

The differences in context in which a common personal noun takes a plural suffix are as follows: (1) When referring to an indefinite number of people, a common personal noun frequently takes a plural suffix in Korean while not in Japanese. (2) A personal noun of multitude or a simple collective personal noun takes a plural suffix very frequently in Korean while seldom in Japanese.

The differences of usage of a plural suffix is as follows: (3) A Japanese suffix, *-tachi*, can refer to two kinds of plural, namely normal plural and plural of approximation, while its Korean counterpart, *-dul*, refers only to normal plural. (4) To refer to plural of approximation in the Korean language, another suffix, *-ne*, is usually used, instead of *-dul*.